

AMg paḍi-saṃ-līna-(tā) をめぐって

八 木 綾 子

は じ め に¹⁾

ジャイナ教は、成立時期と地域を仏教と同じくし、その教団は現在までインド国内で存続してきた。聖典を伝承し、女性の出家者を認め、出家者が白衣を着用する白衣派と、修行を積んだ男性出家者が裸形をとることを認める裸形派（空衣派）に大別される。ジャイナ教と仏教はともに解脱を目標として、それに到達するための手段を説く。両教の伝承する經典には、共通する用語や概念もみられる。一方では、仏教にとってジャイナ教は同時代における対抗勢力の一つであり、両教の聖典の教判的な部分には互いに批判的な言及がみられる。例えば、仏陀はためにならない苦行は捨てて瞑想（Skt dhyāna, 漢訳 禪定）による解脱を説いたため、苦行至上主義の代表格としばしば見なされるジャイナ教から、仏教は楽により楽を得ると批判される [谷川 1979 : 31]。

つまり、同一の目標をもちながら、そこに至る手段に両教の相違が見られるということである。両教の經典に共通する用語にも、立場の違いに基づく、意味上の違いがある場合もあり、そのような用語について文献学的な研究が続けられてきた。本稿では、パーリ仏典と白衣派ジャイナ聖典にともに使用例のある、動詞 √li 'to cling' と前接辞のうちで主に prati-, 或いは sam-との複合語を取り上げて²⁾、両經典にみられる用例の検討を通して、使用法の差異を指摘し、それに基づいて各々の特徴を明確にしたい。この語は後述の如く、「閑居坐臥 (viviktaśayanāśana)」とともに使用されることもあり、両語は関わりがあるとみられるが、本稿では √li と派生語の用例を検討することとし、後者との関わりについては別稿を期したい。

1) 本稿は、「京都エラスムス計画——持続的社会発展に向けた次世代アジア共同研究リーダー育成」(京都大学)の国際研究機関派遣(2011年度)の助成を受けた、その成果である。

2) *PW* には、√li と前接辞 prati-sam-の複合語は挙げられていない。Monier Williams の梵英辞典は、pratisaṃlayana, 'saṃlīna を挙げるが、その出典は梵語仏典である。

I パーリ仏典における用例

1 paṭisallāna

まず、パーリ仏典において、動詞 *prati-sam/hi* は「退く」を意味し、*paṭ(/t)isallāna/īna* は、人気のないところ等に「退くこと、退いた（ひと）」を表す³⁾。しばしば、雨期に退いて瞑想を行うといい⁴⁾、退く目的の一つは瞑想することとみられる。そして、Thera 577 は比丘が退くに相応しい場所を次のように述べる。

vivittaṃ appanigghosaṃ vālamiganisevitaṃ,

seve senāsaṇaṃ bhikkhu paṭisallānakāraṇā.

For the sake of solitary meditation, a bhikkhu should resort to a lodging which is secluded, with little sound, haunted by beasts of prey [Norman 1969 : 57].

独り瞑想するためには、修行者は、遠く離れて、騒音の少ない、猛獣の出没するような臥処を受用すべきである [中村訳 1982 : 127]。

より具体的に、退く場所として、村から往来可能な範囲で適度な距離があり、人気がなく静かなところは、退くに相応しいといわれる⁵⁾。このような場所に「退いた人の心には考えが生じる (*paṭisallīnassa evaṃ ceto parivattakko udapādi*)」といい、考えごとをするに適した状態にあることがわかる。そして、退いている人に近づくことは憚られている⁶⁾。さらに、出家者には教示・質問・ヨーガとともに退くための時間があり⁷⁾、出家者の行うべきことの一つである。また、退くことを楽しむことは、世尊によって坐臥の使用を認める理由の一つ

3) SN I IV. 1.2 (103, 7) = Vin I 1.5.2 (4, 32) : *atha kho Bhagavato rahogataṃ paṭisallīnassa*… 「さて、世尊は人気のないところに行き、退いて……」

4) DN II xix. 38 (237, 14-15) : *Yo vassike cattāro māse paṭisalliyati, karuṇaṃ jhānaṃ jhāyati*. 「雨期の4ヶ月間、退き、悲の瞑想を行うもの。」 cf. DN II xix. 38-43, DN II xxi. 1.5 (265, 2).

5) Vin I 1.22.16 : *kattha nu kho bhagavā vihareyya, yaṃ assa gāmato n' eva avidūre na accāsaṇe gamanāgamanasampannaṃ atthikānaṃ atthikānaṃ manusānaṃ abhikkamaṇīyaṃ, divā appākiṇṇaṃ rattim appasaddaṃ appanigghosaṃ vijānavātaṃ manussarāhaseyyakaṃ paṭisallānasārappaṇaṃ*. 「実に、世尊はどこで過ごされるべきであろうか。それは、村から遠すぎず、近すぎず、往来することができて、相応しい人々が、近づくことができるところであろう。日中は混み合わず、夜にはわずかな声や音しかせず、人々から離れて、人気のないところに寝床があるのが、退くに相応しい。」 cf. MN III 108 (13, 16-24).

6) Vin III XV. 1.1 : *icchāmi ahaṃ bhikkhave addhamāsaṃ paṭisalliyituṃ, n' amhi kenaci upasaṃkamitabbo aññatra ekena piṇḍapātanihārakenā* 'ti. 「比丘らよ、私は、半月間退くことを望む。施食を運んでくる一人以外、誰も近づきべきでない。」 DN I vi. 2 (151, 1-2) : *akālo kho āvuso Bhagavantaṃ dassanāya, paṭisallīno Bhagavā* 'ti. 「長寿なる方よ、世尊に会うに適した時ではない。世尊は退かれているから。」 cf. DN II xxi. 1.10 ; III xxv. 1, SN I VI. 1.6-8 ; VI. 2.7, MN II 78 (23, 5-6).

7) AN IV LXIV. 7 (114, 27-28) : *ayaṃ kālo uddesassa, ayaṃ kālo paripucchāya, ayaṃ kālo yogassa, ayaṃ kālo paṭisallānāya* 'ti. 「この時間は教示のため、この時間は質問のため、この時間はヨーガのため、この時間は退くため。」

とされる⁸⁾。加えて、退くことは、遠からず漏減に到達する比丘が具える七つの性質の一つであり、「信仰のある (saddha)」や「戒を持つ (sīlavat)」とともに列挙されている⁹⁾。従って、出家者の行である paṭisallāna は、「人気のない所に行き (rahogata)」, 「離れた坐臥 (vivitasayanāsana)」を用いることを基本としつつ、その意味は「退く」のみに限られないことが看取できよう。

比丘がこのような paṭisallāna を行った結果について、Saṃyutta Nikāya III の『退くこと』という小経は、色・受・行の生成と帰滅を知るといい¹⁰⁾、Itivuttaka 45 は現法における智慧が有余における不還が期待されるという¹¹⁾。

他方、主に Jātaka における日常的な場面では、paṭisallāna は、夜に人々が住まい等に退くことや¹²⁾、腹ばいになって茂みに隠れた犬に対して用いられる (Jā IV 504¹³⁾)。この二つの用例からは、市中から住まいへ、あるいは、通り道から茂みの中へというように、話題の中心から離れる動きを paṭisallāna は表すことが理解される。

この Jā IV 504 における、犬たちが腹ばいになり茂みに退くという動作は、声を出す等の

8) DN III xxix. 22 (130, 14-19) : Yaṃ vo mayā senāsanam anuññātam, alam vo tam yāvad eva sītassa paṭighātāya uphassa paṭighātāya dāmsamakasavātātāpasirimsapapasamphassānam paṭighātāya yāvad eva utuparissayavinodakam paṭisallānārāmattham. 「私により、汝らに、坐臥は認められている。全くそれは、寒さに打ち勝つため、暑さに打ち勝つため、蚊・蛇・熱風・蛇類との接触を避けるためであり、実に、時節の危難を除くため、退くことを楽しむためである。」= MN I 2, AN III LVIII. 4.

9) AN IV LVII. 1-2 (85, 1-6) : 1. Sattahi bhikkhave dhammehi samannāgato bhikkhu na cirass' eva āsāvānam khayā... sacchikatvā upasampajja vihareyya. Katamehi sattahi? 2. Idha bhikkhave bhikkhu saddho hoti, sīlavā hoti, bahussuto hoti, paṭisallino hoti, āradhaviṛiyo hoti, satimā hoti, paññavā hoti.

10) SN III XXII. 6.2 : Paṭisallāne bhikkhave yogam āpajjatha paṭisallino bhikkhave bhikkhu yathā bhūtam pajānāti. 3. Kiñca yathābhūtam pajānāti. Rūpassa samudayaṃ ca atthagamaṃ ca. Vedanāya samudayaṃ ca atthagamaṃ ca. Saṅkhārānaṃ samudayaṃ ca atthagamaṃ ca. 「2. 比丘らよ、退くことに専心しなさい。比丘らよ、退いた比丘はありのままに知る。3. 何を、ありのままに知るのですか。色の生成と帰滅を。受の生成と帰滅を。行の生成と帰滅を。」

11) Iti 45 (p. 39) : Paṭisallānārāmaṇaṃ bhikkhave viharataṃ paṭisallānaratānaṃ ajjhataṃ cetosamathamanuyuttānaṃ anirākatajjhānaṇaṃ vipassanāya samannāgatānaṃ brūhetānaṃ suññāgāraṇaṃ. dvinnam phalaṇaṃ aññataraṃ phalaṃ pāṭikaṅkham diṭṭhe va dhamme aññā, sati vā upādisese anāgāmīti ti. 「比丘らよ、退くことを楽しみ、退くことに満足し、内心の寂止に努め、瞑想を疎かにせず、観をそなえ、もろもろの空家の増益者として過ごしているもの (比丘) たちには、二つの果のうち一方が期待される。現法における智慧か、あるいは有余における不還である。」

12) Jā III 318 (60, 17-20) : ayam coro raṭṭhe pākato, samandhakāraṃ tāva hotu, atha naṃ manussānaṃ paṭisallānavelāya ghātāppesāmmīti apadesaṃ katvā muhuttaṃ vitināmetvā manussesu paṭisallinesu... 「この盗人は、王国の中で知られている。真っ暗になるまでいろ。人々が退く時間に、私は殺させよう、と指示して、1 ムフルタの時間を過ごし、人々が退いた時に」 cf. Jā II 177 (77, 11, 13) ; III 416 (415, 14) ; IV 491 (333, 21).

13) Jā IV 504 (438, 5-7) : susikkhitā koleyyakā sunakhā tāya saññāya gumbaṃ pavisitvā udarena nipajjimsu. So tesam paṭisallinabhāvaṃ ñatvā... 「よく訓練された素性のよい犬たちは、彼の合図により、茂みに入って腹ばいになった。彼は、彼ら (犬たち) の退いた状態を知って。」

一部の行為を抑制することを伴う。同様に、出家者の場合には、人気のないところへ退き、一部の行為を抑制することを paṭisallāna は表すとみられる。そのような心身の状態は、静慮し瞑想するに相応しいものであろう。次に √li と結びつく他の前接辞の用例を確認したい。

2 sam-, ā-, prati-√li に由来する語

sam√li に由来する sallina は、否定辞 a- と結びついて用いられることが多く、「不退の」を意味する。心 (citta) や活力 (vīrya) を形容して、入滅する釈尊の描写でも用いられる¹⁴⁾。ā√li に由来するとされる allina は、くっつく、執着するを意味する¹⁵⁾。動詞 prati√li は prati√kuṭ と prati√vṛt と並置されて、手で刀を反らせるように、離れていく動きを表すと見られる¹⁶⁾。心 (citta) が主語となる用例もある¹⁷⁾。過去分詞 paṭilīna の用例は限られるが、人の優れた資質を表す語とともに挙げられて (Sn 852¹⁸⁾)、複合語の前分となる用例も確認される¹⁹⁾。また、釈尊も「控えた牡牛 (paṭilīnanisabba)²⁰⁾」と言われる。そして、控えている (paṭilīna) 比丘を AN II 38.4 は次のように述べる。

Kathaṃ ca bhikkhave bhikkhu paṭilīno hoti? Idha bhikkhave bhikkhuno asmimāno pahīno hoti ucchinnamūlo tālavatthukato anabhāvakato āyatiṃ anuppādadhammo. Evaṃ kho bhikkhave bhikkhu paṭilīno hoti. (AN II 38.4)

比丘らよ、控えている比丘はどのようなですか。比丘らよ、この世で、比丘の私とはいう思いは放棄されていて、根が切断されたターラ樹の如く、有を作らず、将来に、発生しない性質のものである。比丘らよ、控えている比丘は、実にこのようである。

以上のパーリ仏典における √li と結びつく前接辞の用例のうち、ā√li は視点の方へ向かっていく動きを表し、その他の前接辞と結びついた √li の用例は離れていく動きを示すとみられる。sallina は、否定辞 a- とともに心や活力に対して肯定的に用いられる。paṭilīna の用例は限られるが、思いが放棄された比丘の状態を表す。paṭilīna と比較すると、paṭisallina は引き退くという実際の行動を示すと見られて、それは心身の動きの抑制を伴うといえよう。

14) DN I xvi. 6.10 (=Thera 906=SN I VI. 2.5) : asallīnena cittena vedanaṃ ajjhavāsaya. 「不退の心でもって、痛みに耐えられた。」

15) ex. MN I (80, 28) : udaracchavi piṭṭhikaṇṭakaṃ allīnā... 「お腹の皮が背骨にくっついて。」

16) SN II XX. 5.2 (265, 4-6) : Aham imaṃ sattiṃ tiṇhaphalaṃ pāṇinā vā muṭṭhinā vā paṭileṇissāmi patikoṭṭissāmi pativaṭṭessāmiti. 「私は、この先の鋭い刀を、手で或は拳で反らせ、曲げて、反転させよう。」

17) AN IV XLVI. 4 (p. 47), Milindapaṇḥo p. 297.

18) Sn 852 : paṭilīno akūhako apihālu amaccharī, appagabbho ajeguccho pesuṇeyye ca no yuto. 「控えて、騙さず、熱望せず、自己中心的でなく、妨害せず、嫌悪せず、陰口にとらわれない人。」 Pj II (p. 549) : paṭilīno rāgādīnaṃ pahinattā tato apagato...

19) Sn 810* : paṭilīnacarassa bhikkhuno 「控えて行動する比丘」 Pj II (p. 534) : tattha paṭilīnacarassa ti tato tato paṭilīnaṃ cittaṃ katvā carantassa...

20) SN I II. 1.7.1 : yo jhānam abuddhi buddho paṭilīnanisabho muni ti. 「悟り、控えた牡牛であるムニは、瞑想に気づいた。」

これは、前述の Thera 577 の *paṭisallānakāraṇā* に対する注釈の²¹⁾、心を対象から引き戻すことという説明とも矛盾しない。

II ジャイナ聖典における用例

1 *paḍisaṃlīnatā* をめぐって

ジャイナ聖典における用例をみる前に、パーリ仏典では *paṭisallāna* は、一連の文脈の中で瞑想 (*dhyāna*) とともに用いられて、心身の働きの抑制を伴うとみられることから、ジャイナ教における瞑想と、心あるいは意の制御について確認しておきたい。瞑想は呼吸法や坐法とともに精神面にも関わる、汎インド的な行法である。現在、ジャイナ教の古来の瞑想法は伝承されておらず、途絶えた理由は明らかでない。後に、瞑想は内的苦行の第六とされて、解脱の最終段階において靈魂は瞑想をしつつ全ての業を減して解脱すると言われるように、ジャイナ教の解脱道でも重要な役割を果たした。文献から中世には修行において重要であったことが確認されるが、古層聖典での記述がさほどみられない理由も不明である [Dundas 2002 : 166-169]²²⁾。しかし、Mahāvira の苦行の様子を伝える *Āyāraṅga* I. 9 章にはまとまった使用例があり、瞑想は祖師に帰せられる行為であるから、その重要性が窺える [谷川 1979 : 42]。

瞑想とも関わるひとの内面について、周知のとおり仏典では心 (*citta*) や意 (*manas*) という語を用いてその制御を説く。そして、五根に加えて意は第六の感官と位置づけられる。一方、ジャイナ聖典では、古層において五根とともに意が知覚器官と位置づけられることはない [安藤 1991 : 232-238]。もっとも、ジャイナ教も行為一般を、意・口・身によって分類するために意という語は使用されて、聖典の新しい部分では「非感官 (*no-indriya, anindriya*)」と称される。

さて、ジャイナ聖典における *paḍisaṃlīnatā* は、6 種の外的苦行の一つである (*Viyāhapannatti* 25.7, *Aup* § 30, *Ṭhāṇa* 6)。解脱に到達するためには、靈魂 (*jīva*) を束縛している業物質 (*karman*) を減する必要がある、その手段として「苦行によって古い悪[業]を振り払う (*Dasav* 10.7)²³⁾」というように、苦行 (*tapas*) が挙げられる。古層聖典は、苦行の内容を具体的に述べないが、後に内的・外的に区別される 12 種類にまとめられた [榎本 1987 : 12-16]。外的苦行の 6 番目として用いられる語には異同があり、*paḍisaṃlī-*

21) Comm. on Thera 577: *paṭisallānakāraṇā* ti: *paṭisallānā* ti, *cittaṃ nānārammaṇā nivattetvā, kammaṭṭhāne yeva cittassa paṭipati, sammadeva, allīyan'atthaṃ*. 「退くために」について、退くとは、心を種々の対象から引き戻して、まさに瞑想の対象に対して、心が実に正しく、くつつくという意味。

22) 古層部分を含むとされる *Āyāraṅga*, *Sūyagada*, *Uttarajjhāyā* と *Dasaveyāliya* の 4 つの聖典に限ると、名詞 *jhāṇa* も動詞 *jhāi* の用例も多くはない。Word Index 1999 : 58 を参照。

23) *tavasā dhuṇai purāṇapāvagaṃ*

natā の他に, saṃlīṇayā (Utt 30.8, PRP 175, Samav 6) と viviktasayanāsana (TAAS 9.19) がある²⁴⁾。これらの中で, 「苦行道 (tapasmārga)」という章題の *Uttarajjhāyā* 30.28 は saṃlīṇatā の内容として閑居坐臥を用いることを述べていて²⁵⁾, 外的苦行の第 6 番目の基本的な内容は閑居坐臥を用いることといえる。なお, この閑居坐臥に退くことが解脱道において果たす機能を, Utt 29.31 は行動の防護といい, 解脱や業滅につながるものである²⁶⁾。

上記の, 外的苦行が言及される箇所以外の paḍisaṃlīna の用例は, Dasav 3.12 と Utt 11.13 に見られる。

āyāvayanti gimhesu hemantesu avāṇḍā,

vāsāsu **paḍisaṃlīṇā** saṃjayā susamāhiyā (Dasav 3.12).

[Monks who are] controlled [and] eager endure the heat in summer-time, in the cold season they go about uncovered, during the rains they live secluded. (Schubring's Kleine Schriften, p. 201)

kalahaḍamaravajjīe buddhe abhijāie,

hirimaṃ **paḍisaṃlīṇe**²⁷⁾ suviṇīe tti vuccāi (Utt 11.13²⁸⁾).

口論と騒動を避けて, 悟り, 高貴な生まれで, 羞恥心を持ち, 退いたものは, よく導かれたものと言われる。

Dasav 3.12^aが述べるように, ジャイナ教でも出家者は雨期の期間は移動を中断して, 滞在所に留まる。「小行 (kṣudrācāra)」を述べる Dasav 3 章の, 12 偈の前後では, 五根の制御や, 寒暑・虫・周囲からの妨害等の修行者に対する様々な危難 (parisaha) の調御を説く²⁹⁾。

24) 白衣派と空衣派の双方から権威を認められる, Umāsvāti による『諦義証得経 (Tattvārthādhigamasūtra)』9.19 では, 外的苦行の 5 番目と 6 番目の順序が逆である。同著者による PRP 175 は, Utt 30.8 と同じ順序である。また, TAAS 9.19 の自註では saṃlīṇatā が用いられている。TAAS 9.19: anaśanāvamaudarya-vṛttipariśaṅkhyānarasatyāgaviviktaśayyāsanakāyākleśā bāhyaṃ tapaḥ. (五番目に対する自註): viviktaśayyāsanatā nāma ekānte 'nabādhe 'saṃsakte strīpaśuśaṇḍakavivarjite śūnyāgāradevakula-sabhāparvataguhādinām anyatam asmin samādhyartham saṃlīnatā. PRP 175^a: rasatyāgaḥ, kāyakleśaḥ saṃlīnateti bāhyaṃ tapaḥ proktam.

25) Utt 30.28: egantamañāvāe itthipasuvivajjīe, sayanāsanaśayanāyā vivittasayanāsaṇaṃ. 「人の来ない一所で, 女性と家畜が除かれたところで, 坐臥を用いることが, 閑居坐臥である。」

26) Utt 29.31: vivittasayanāsaṇayāe ṇaṃ bhante jīve kiṃ jaṇayai. vivittasayanāsaṇayāe carittaguttim jaṇayai. carittagutte ya ṇaṃ jīve vivittāhāre dādhacaritte egantarāe mokkhabhāvaapaḍivanne aṭṭhaviḥakammagaṇṭhiṃ nijjarei. 「大徳よ, 閑居坐臥の状態から, 靈魂は何を生み出すのですか。閑居坐臥の状態から, 行動の防護を生み出す。そして, 行動を防護した靈魂は, 別個の食事をもち, 堅固な行動をもち, 人気のないところで解脱の状態に達して, 八種の業の束縛を減する。」

27) UttSā (pp. 291-292): 'pratisaṃlīnaḥ' gurusakāśe 'nyatra vā kāryaṃ vinā na yatas tataś ceṣṭate.

28) SBE 45 (p. 47): if he abstains from quarrels and rows; if he is enlightened, polite, decent, and quiet; then he is called well-behaved.

29) pañcāsavaparinnāyā tiguttā chasu saṃjayā, pañcaniggahaṇā dhīrā nigganthā ujjudamṣiṇo (3.11). parisahariū dantā dhuyamohā jīndiyā, savvadukkhappahīṇaṭṭhā pakkamanti mahesiṇo (Dasav 3.13).

このように、修行者はなし難く耐え難い行を行った後、最終偈では、自制と苦行により以前の業を減して、成就への道に到達して涅槃するという³⁰⁾。修行者にとって、冬と夏の寒暑は危難の一つとされて³¹⁾、それに耐えねばならない。そのような積極的な苦行の様子とともに挙げられる paḍisaṃlīna にも、積極的な苦行の意味合いを看取できよう。雨期の間、滞在所に引き退いて心身を自制していることを表すとみられる³²⁾。一方、Utt 11.13 の paḍisaṃlīna は意味が確立した語として、悟った (buddha) や羞恥心を持つ (hrimat) と同じく³³⁾、比丘の優れた性質を表す語として用いられている印象を受ける。

2 その他の関連語形

その他の関連語形として、古層と言われる Āyāraṅga 第1篇にもみられる allīṇa と、alliṇa とともに複合語の中で用いられている paḍīṇa (Dasav 8.40) がある。

savvaṃ hāsaṃ pariccajja **allīṇagutto**³⁴⁾ parivvāe. (Āy I. 3.3.3 (p. 16 l. 11))³⁵⁾

あらゆる笑いを放棄して、制御し防護したものは、歩き回るべし。

kesikumārasamaṇe goyame ya mahāyase,

ubhao vi tattha vihariṃsu **allīṇā**³⁶⁾ susamāhiyā (Utt 23.9)³⁷⁾

若い沙門のケーシーと、大きな名声をもつゴーヤマは、制御しよく集中して、双方ともそこに滞在していた。

rāṇiesu viṇayaṃ pauṇje dhuvasilayaṃ sayayaṃ [na]³⁸⁾ hāvaejjā,

kummo vva **allīṇapaḍīṇagutto** parakkamejjā tavaṣaṃjamammi. (Dasav 8.40)

30) dukkarāṃ karettāṇaṃ dussahāṃ sahetu ya, ke ettha devakogesu keḷi sījanti nirayā (3.14). khavittā puvvakammāṃ saṃjameṇa taveṇa ya, siddhimaggamaṇupattā tāṇo parinivvuda (Dasav 3.15), tti bemi.

31) 22 の法数にまとめられた危難 (parisaha) の中に、暑さ、寒さが含まれている。Cf. Utt 2.4-2.7.

32) 注釈は感官と非感官が退く (抑制される) ことに言及してる。DasavCū (p. 63) : sadā im-diya-noṃdiyapaḍisaṃlīṇā viśeṣeṇa sīṇhasaṃghaṭṭaparīharaṇatthaṃ ṇivātalataṇagatā vāsasu paḍisaṃlīṇā na gāmaṇugāmaṃ dūtijjanti. DasavHa : 'saṃlīṇā' ity ekāśrayasthā bhavanti.

33) hri については河崎 2008 : 272-277 を参照。

34) Śīlaṅka's comm. (p. 112) : maryādayendriyanirodhādikayā līṇaḥ ālīno gupto manovākkāyakaṃ mabhiḥ kūrmaṇa vā saṃvṛtagātraḥ ālīnaś cāsau guptaś cālīnaguptaḥ sa evambhūtaḥ.

35) 諸訳は次の通り。SBE 22 (p. 33 l. 5) : Giving up all gaiety, circumspect and restrained, one should lead a religious life. *Worte Mahāvīras* (p. 84) : alle Freude meidend soll er eingezogen und achtsam als Mönch wandern. *Āyāro* (p. 170) Abandoning all kinds of (frivolities such as) laughter etc. and subjugating the senses and disciplining the mind speech and body, he should lead the life of an ascetic. ≡ Āy I. 5.6 (26. 7) : ih' ārāmaṃ parinnāya **allīṇagutto** parivvāe.

36) UttŚā (p. 75) : allīṇa tti ālīṇau manovākkāyaguptā vā āśritau vā prakramāt tasyāṃ eva puri yadvā ālīṇau prthagavasthānena parasparam āśiṣṭau. . .

37) SBE 45 (p. 120) : The young Śramaṇa Keśi and the famous Gautama, both lived there, protecting themselves (by the Guptis) and being careful.

38) na は、Leumann の校訂版では採用されていないが、Cūrṇi と Haribhadra の注釈、Jaina Āgama Series, Navasuttāṇi では、na を入れるので後者の読みに従っている。

宝勝の人々に於いて規律を用うべし。堅固なる守戒の性を、常に棄てしむるなかれ。亀の甲に住し (ālīna) 隠れ (pralīna) 護らるる如く、苦行と自制とに於いて秀いずべし [松濤 1968 : 113]。

hatthaṃ pāyaṃ ca kāyaṃ ca paṇihāya jīndie,

allīṇagutto³⁹⁾ nisie sagāse guruṇo muṇi (Dasav 8.44)

諸根に打ち克ちて、手と足と身体とを制し、牟尼は(世間、外物との)接触 (allīṇa = ālīna) より守られて、師の近くに坐すべし [松濤 1968 : 113]。

まず、allīṇa の語形について注釈は Skt ālīna に還元して動詞 āvli に由来する語とみる⁴⁰⁾。一方、Schubring は否定辞 a- と √vli 'to press down, to crush' との複合語とみる [Schubring 1920 : 102]。後者の妥当性については、バラモン文献における √vli と結びつく前接辞の用例を検討する必要もあり、その作業は別の機会にすることとして、以下ではひとまず注釈に従って allīṇa は āvli に由来する語形とみておきたい。

allīṇa は、後には使われなくなったようでその用例数は限られている。単独で用いられて、「よく集中した (susamāhita)」と同様に優れた比丘の資質を表す語と理解される (Utt 23.9)。そして、「防護した (gupta)」と複合語を作り、後者と類似する意味を表すとみられる。さらに、「行の抑制 (ācārapranidhi)」という章題の Dasaveyāliya 8.40⁴¹⁾では paliṇa と対になり「防護した (gupta)」を後分とする複合語となり、亀の動きとも対応すると理解される。亀の喩は仏典やバラモン文献でも用いられて、四肢と頭尾を甲羅に収める亀の動きを用いて、意や感官の制御を説くか、或いは、その具体的な方法を示すものである [谷川 1994 : 122-128]。Dasav 8.40 の注によれば、亀が四肢と頭尾を甲羅に収めては、ゆっくりと伸ばすように、修行者は、感官の働きと体の動きを制御して防護し、注意のためにそれらを動かして防護することを allīṇapaliṇagutta は意味する⁴¹⁾。この亀の例えは、前述の Viyāhapaṇṇatti 25.7 (Aup § 30) にもみられる。そこでは、paḍisaṃlīṇatā の内容を次の 4 つに分ける。感官の・汚濁の・行為の paḍisaṃlīṇatā と⁴²⁾、閑居坐臥を用いることであ

39) DasavCū (196, 8) : allīṇo ṇātidūramaṇāsaṇṇe [gutto] maṇasā guruvayaṇe uvayutto vāyāe kajjacodaṇaparo...

40) Pāli 語においても alliyati = ā-liyate とされ āvli に由来するとみられている [Geiger 1943 : 132]。また、否定辞 a- と lina の複合語 alīna もみられるが、allīna (āvli) と alīna は使い分けられている。

41) DasavCū (195, 6-9) : kummo kacchamo, jadhā so sajjivitaparipālāṇatthamaṅgaṇi kabhalle saṃharati, gamaṇātikāraṇe ya saṇiyaṃ pasāreti, taḥā sādhu vi saṃjamakāḍahe iṇḍiyappayāraṃ kāyacetṭhaṃ nirumbhiṇa allīṇagutto, kāraṇe jataṇāe tāni ceva pavattayaṃto paliṇagutto, guttasaddo patteyaṃ parisamappati.

42) Viy 25.7 sū 211 se kiṃ taṃ paḍisaṃlīṇayā? paḍisaṃlīṇayā cauvvihā pannattā, taṃ jahā - iṇḍiyapaḍisaṃlīṇayā kasāyapaḍisaṃlīṇayā jogapaḍisaṃlīṇayā vivittasayaṇasaṇasevaṇayā.

sū 212 se kiṃ taṃ iṇḍiyapaḍisaṃlīṇayā? iṇḍiyapaḍisaṃlīṇayā paṃcavihā pannattā, taṃ jahā - sotīṇḍiyavisayaṇāyāraṇiroho vā, so iṇḍiyavisayaṇappattesu vā atthesu rāgaddosaviṇiggaho; ... se ttam iṇḍiyapaḍisaṃlīṇayā. (cf. Thāṇa 5.2 sū 427)

sū 213 se kiṃ taṃ kasāyapaḍisaṃlīṇayā? kasāyapaḍisaṃlīṇayā cauvvihā pannattā, taṃ jahā -

る⁴³⁾。これらの中で、行為の *paḍisaṃlīṇatā* は、意・口・身の3つに分けられて⁴⁴⁾、身の *paḍisaṃlīṇatā* の説明の中に亀の例えが用いられる⁴⁵⁾。

お わ り に

パーリ仏典における前接辞+*√li* とその派生語の用例は、ジャイナ聖典における用例数よりかなり多い。*prati-saṃ√li* は「退く」を意味し、退くという行為は、心身の動きにおける何らかの制御を伴うことが推察される。これは日常的な場面で使用される *paṭisaṃlāna* の例 (Jā IV 504) から確認される。また、退くことと瞑想することが一連の文脈で用いられる用例も多い。退くことにともなう、心身が抑制されて瞑想するに相應しい状態になると理解されよう。

ジャイナ聖典における *√li* と前接辞の使用例は限られている。その中で、*paḍisaṃlīṇatā* は6種の外的苦行の一つを表す術語であるが、Utt 30.28 や Viy 25.7 とその平行箇所では「閑居坐臥 (*vivikṭasayanāsana*) [を用いること]」という説明がされる。閑居に退くとともに、

↘ *kohodayaniroho vā, udayappattassa vā kohassa viphalikaraṇaṃ evaṃ jāva lobhodayaniroho vā udayappattassa vā, lobhassa viphalikaraṇaṃ, se ttaṃ kasāyapaḍisaṃlīṇayā.* (cf. *Ṭhāṇa* 4.2 sū 278) 「211. 制御とは何か。四種の制御が知らしめられた。それは以下の通り。感官の制御、汚濁の制御、行為の制御、離れた坐臥を用いることである。212. 感官の制御とは何か。五種の感官の制御が知らしめられた。それは以下の通り。耳という感官が対象に働きかけることを妨げること、或は、耳という感官の対象〔領域〕に到達した対象に対する、愛着と嫌悪を抑制すること。〔目、鼻、舌、触についても同様〕これらが感官の制御である。213. 汚濁の制御とは何か。四種の汚濁の制御が知らしめられている。怒りが起こることを避けること、或は、起こった怒りの効果をなくすること。〔高慢 (*māna*) と欺瞞 (*māyā*) についても同様〕食欲が起こることを避けること、或は、起こった食欲の効果をなくすること。これらが、汚濁の制御である。」

43) 四番目の閑居坐臥を用いることは、Utt 30.28 が説明する *saṃlīṇatā* の内容に対応する。省略を用いてない *Aupapātika* § 30 VI. 4 (p.40) を挙げる。 *jaṇ ṇaṃ ārāmesu ujjānesu devakulesu sahāsu pavāsu paṇiyagihesu paṇiyasālāsu itthipasaṇḍagasaṃsattavirahiyāsu vasahīsu phāsuesanijjāṃ piḍhaphalagasejjāsamthāragam uvasampajjittānaṃ viharai.* 「園林で、庭園で、寺院で、集会場で、湿った所で、店で、市場で、女性と家畜と黄門がまわりつくことのない滞在場所で、適切な施物を、椅子・長椅子・寝台・敷布を得て、過ごす。」

44) *Viy 25.7 sū 214 se kiṃ taṃ jogapaḍisaṃlīṇayā? jogapaḍisaṃlīṇayā tivihā pannattā, taṃ jahā - akusalamaṇaniroho vā, kusalamaṇaudiraṇaṃ vā, maṇassa vā egattibhāvakaraṇaṃ, akusaravainiroho vā, kusalavaiudiraṇaṃ vā, vaie vā egattibhāvakaraṇaṃ.* 「214. 行為の制御とは何か。3種の行為の制御が知らしめられている。それは以下の通り。好ましくない意を避けること、或は、好ましい意を起こすこと、或は、意が一つとなった状態を作ること。好ましくない言葉を避けること、或は、好ましい言葉を起こすこと、或は、言葉において一つとなった状態を作ること。」

45) *Viy 25.7 sū 215 se kiṃ taṃ kāyapaḍisaṃlīṇayā? kāyapaḍisaṃlīṇayā jaṇ ṇaṃ susamāhiyapaṣaṃta-sāhariyapāṇipāe kummo iva guttiṃdie allīṇe pallīṇe ciṭṭhai. se ttaṃ kāyapaḍisaṃlīṇayā se ttaṃ jogapaḍisaṃlīṇayā.* 「身体の制御とは何か。身体の制御とは、よく集中して静まり抑制された手足を持つ亀の如く、防護された感官を持ち、制御し〔ゆっくりと〕動くもの。それが、身体の制御である。以上が行為の制御である。」

感官や意口身を制御しなければならない。Dasav 3.12 の, paḍisaṃlīna は、雨期に滞在所に引き退いて心身を制御する修行者を表していて、Pāli paṭisaṃlāna (‘īna) の使い方と共通する。しかし、用いられる文脈には違いがみられる。Pāli paṭisaṃlāna が瞑想 (dhyāna) と関わる用例が多いのに対して、Dasav 3 章では、五つの漏入を絶つことや、五根を制御することや、parisaha という語で表される諸々の危難に耐えることを説く中で paḍisaṃlīna は用いられて、paḍisaṃlīna にも同様の苦行的な意味合いが看取されよう。

このような違いは、瞑想を重視する仏教と、行為一般を意・口・身に分類してその制御をときつつ身体の行為を重視し、身体でもって諸々の危難に触れて耐えることが苦行であり、業を減するのに有効であるとするジャイナ教の立場の違いを反映すると思われる。

なお、ジャイナ聖典における allīna の還元されるサンスクリット語形の検討は残された課題である。今後は、バラモン文献における √vli と √li, およびその派生語や viviktaśayanā-sana の用例も検討し比較することで、ジャイナ古層聖典における心や意の制御について考察を進めたい。

参考文献

SBE : The Sacred Books of the East.

AN : *The Aṅguttara-Nikāya*. Ed. by Richard Morris. 1st publ. 1885. Second Edition revised by A. K. Warder. 1961. Rep ed The Pali Text Society, 1958.

Āy I : *Ācārāṅga-Sūtra, Erster Śrutaskandha. Text, Analyse und Glossar*. Ed. by Walther Schubring. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes 12(4). Leipzig, 1910.

Āyāro : *Ācārāṅga sūtra, the first Aṅga āgama (canon) of the Jainas : the text in Devanāgarī and roman script with English translation, annotation, notes, glossary and Index*. Today and Tomorrow's Printers and Publishers, 1981.

Aup : *Das Aupapātika Sūtra, erstes Upāṅga der Jaina. I. Theil. Einleitung, Text und Glossar*. (Ed.) Ernst Leumann. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes 8(2). Leipzig, 1883.

Dasav : *The Dasaveyāliya Sutta*. Ed. by ERNST LEUMANN, and Translated, with Introduction and Notes, by WALTHER SCHUBRING. 1st publ. Ahmedabad, 1932 (Schubring's *Kleine Schriften*, 1977, 109-248).

DasavCū : *Saṃyambhava's Dasakāliyasuttaṃ with Bhadrabāhu's Nirvyukti and Agastyaśiṃha's Cūrṇi*. Ed. by Muni Shri Punyavijayaji. Prakrit Text Society Series 17. 1st publ. 1973; repr. Ahmedabad, 2003.

DN : *The Dīgha Nikāya* III. Ed. by J. Estlin Carpenter. 1st publ. 1911; repr. The Pali Text Society, 1975-1976.

Iti : *Iti-Vuttaka*. Ed. by Ernst Windisch. 1st publ. 1889; repr. The Pali Text Society, 1975.

Jā : *The Jātaka, Together with its Commentary. Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha* IV. Ed. by V. Fausbøll. 1st publ. 1887; repr. The Pali Text Society, 1962-1964.

- MN : *The Majjhima-Nikāya* I. Ed. by V. Trenckner. 1st publ. 1888 ; repr. 1979. II, III. Ed. by Robert Chalmers. 1st publ. 1896, 1899 ; repr. The Pali Text Society, 1951.
- Pj : *Sutta-Nipāta Commentary, being Paramatthajotikā* 2. Ed. by Helmer Smith. Pali Text Society, 1966.
- PRP : *Ācārya Umāsvāti Vācaka's Praśamaratiprakaraṇa*. Critically Edited with English Translation by Vajreshwar S. Shastri. L. D. Series 107. L. D. Institute of Indology. Ahmedabad, 1989.
- PW : *Sanskrit-Wörterbuch*. Ed. by BÖHTLINGK, OTTO and RUDOLPH ROTH. 1st publ. 1855-1875 ; repr. Motilal Banarsidass, 1999.
- SN : *The Saṃyutta-Nikāya of the Sutta-Piṭaka*. 5 Parts. Ed. by M. Léon Feer. 1st publ. 1884, 1888, 1890, 1894, 1898 ; repr. The Pali Text Society, 1973-1976.
- Sn : *Sutta-Nipāta*. New Edition. Ed. by Dines Andersen and Helmer Smith. Published for The Pali Text Society, 1913 ; repr. Routledge & Kegan Paul, 1984.
- TAAS : Tattvārthadhigamasūtra by Umāsvāti. *Bibliotheca Indica*, 1903-1905.
- Ṭhāṇa : Ṭhāṇaṃgasutta, Ṭhāṇaṃgasuttaṃ and Samāvāyaṃgasuttaṃ. *Jaina-Āgama-Series* 3, 1985.
- Samav : Samavāyaṃgasutta. *Jaina-Āgama-Series* 3, 1985.
- Thera : *The Thera- and Therī-Gāthā : (Stanzas ascribed to Elders of the Buddhist Order of Recluses)*. Ed. by Hermann Oldenberg and Richard Pischel. 1st publ. 1883. Second Edition with Appendices by K. R. Norman and L. Alsdorf. The Pali Text Society, 1966.
- Utt : *The Uttarādhyayanasūtra, Being the First Mūlasūtra of the Śvetāmbara Jains. Edited with an Introduction, Critical Notes and a Commentary*. Ed. by Jarl Charpentier. Archives d'Études Orientales 18(1-2). Uppsala, 1921-1922.
- UttŚā : Śāntisūri's vṛtti on Uttarādhyayana. *Āgamasuttāṇi* 28. Muni Diparatnasāgara. 2000.
- Vin : *The Vinaya Piṭakaṃ. One of the Principal Buddhist Holy Scriptures in the Pāli Language*. 5 Vols. Ed. by Hermann Oldenberg. 1st publ. 1879, 1880, 1881, 1882, 1883 ; repr. The Pali Text Society, 1982.
- Viy : *Viyāhāṇṇattisuttaṃ* I. *Jaina-Āgama-Series* 4. Ed. by Pt. Bechardas J. Doshi. Bombay, 1974.
- Word Index : *A Word Index and Reverse Word Index to Early Jain Canonical Texts, Āyaraṇa, Sūyagaḍa, Uttarajjhāyā, Dasaveyāliya, and Isibhāsiyāiṃ*. (Ed.) YAMAZAKI, MORIICHI and OUSAKA, YUMI. *Philologica Asiatica Monograph Series* 15. The Chūō Academic Research Institute. Tokyo. 1999.
- Dundas, P. (2002) *The Jains*. 1st publ. 1992 ; Second Edition. Routledge.
- Geiger, W. (1943) *A Pali Grammar* (rep ed 2005). The Pali Text Society.
- Muni Jambuvijaya (ed) (1978) *Ācārāṅgasūtram and Sūtrakṛtāṅgasūtram, With the Nirukti of Ācārya Bhadrabāhu Svāmī and the Commentary of Śīlāṅkacārya*. Lālā Sundarlāl Jain Āgama-granthamālā I. Motilal Banarsidass.
- Jacobi, H. (tr) (1884, 1895) *Jaina Sūtras, Part I, The Ākārāṅga Sūtra, The Kalpa Sūtra. Part II, The Uttarādhyayana Sūtra, The Sūtrakṛtāṅga Sūtra*. The Sacred Books of the East 22, 45 (1995)

- rep ed). Motilal Banarsidass.
- Jaina Pāribhāṣika Śabdakośa, Dictionary of Technical Terms of Jainism.* (English Version). Synod Chief : Ganadhipati Tulsi, Lexicographer : Acharya Mahaprajna. Jain Vishva Bharati and Jain Vishva Bharati University. 2009.
- Mukherjee, S. (tr) (1995) *Illuminator of Jaina Tenets, English Rendering of Jaina-Siddhānta-Dīpikā* by Ganadhipati Tulsi. Jain Vishva Bharati.
- Norman, K. R. (tr) (1969) *The Elders' Verses I, Theragāthā*. The Pali Text Society. 2nd edition.
- Trenckner, V. (ed) (1928) *The Milindapañho, being dialogues between King Milinda and the Buddhist sage Nāgasena*, (1962 rep ed) the Pali Text Society.
- Schubring, W (1962) *Worte Mahāvīras, Kritische Übersetzungen aus dem Kanon der Jaina*. Göttingen.
- Vallely, A. (2002) *Guardians of the Transcendent*. University of Toronto Press.
- 安藤嘉則 (1991) ジャイナ哲学における意（マナス）について『東北大学印度学講座六十五周年記念論集 インド思想における人間観』平楽寺書店. 231-252.
- 榎本正明 (1987) Jaina の tapas について『華頂短期大学研究紀要』32, 12-30.
- 河崎 豊 (2008) 白衣派ジャイナ教徒の羞恥心『印度哲学仏教学研究』57-1, 272-277.
- 谷川泰教 (1979) ジャイナ教の解脱観 —— 仏教との交渉において —— 『日本仏教学会年報』44, 31-48.
- 谷川泰教 (1994) 『沙門道の源流と展開 —— 初期仏教とジャイナ教の比較研究 ——』(博士論文).
- 中村元 (訳) (1982) 『仏弟子の告白』テーラガーター. 岩波文庫 (rep ed 2001).
- 中村元 (訳) (1986) 『ブッダ神々との対話』サンユッタ・ニカーヤ I. 岩波文庫 (rep ed 2000).
- 松濤誠廉 (訳) (1968) ダサヴェーヤーリヤ・スッタ『大正大学研究紀要』53, 100-150.
- 堀田和義 (2007) 砂漠の中心で不殺生を叫ぶ聖者たち —— ラードゥヌーン見聞録 —— 『仏教文化』46, 81-110.

(大阪大学外国語学部非常勤)